

大崎 勇次……主人公。生活全般ややだらしないおじさん。
受け。

うるは じゅん
漆葉 純……勇次の家に住み着いた美青年。几帳面で嫉妬
深い性格。

プレイ内容

お仕置き おじさん受け 年下敬語攻め 羞恥プレイ
スパンキング 犬プレイ 連続絶頂 撮影 前立腺責め
甘々コメディ

神様、俺がなにをしたって言うんだ。

冴えない中年男の一人暮らし。そんなアパートに、少々派手すぎる美貌の青年が仁王立ちしている。豊かで長いウェーブヘアに、涼し気な双眸。モデルみたいな良い男。

対する俺ときたら、下半身丸出しで床に両手両膝をついての四つん這い。いくら自堕落に生きてきたとは言え、土曜日の朝日を浴びながら四つん這いにされることが、現代日本で許されていていいのだろうか。

「いいですか、勇次さん。今からあなたは犬です。犬なんだから僕の命令には絶対服従。いいですね、了解？」

「ワンッ」

「今からこのパドルであなたのお尻を百回叩きます。了解？」

思わず俺は口をひらく。

「犬は殴っちゃダメだろ！」

「返事はワンだけだっつてんだろこの駄犬！」

「ワンッ！」

三十分ほど時間を巻き戻そう。時刻は午前六時すぎ。ジワジワと昇ってくる冬の朝日をバックに、俺は重たい気分で自宅マンションのエレベーターに乗り込んだ。見事なまでの朝帰り。

スマホの履歴には、最近家に住み着いた同居人からの鬼着信。この恐ろしい着信履歴の数をみて、素直に返信できると思うのか？

玄関扉をゆっくり開いて、中を覗き込む。

センサーライト以外の照明は落とされ、家人はまだ眠りに
ついているようだった。できるだけ物音を立てないように靴
をぬぎ、抜き足差し足で廊下を進んで、リビングの照明をつ
けた途端、ソファに座り込む人影をみつけて飛びあがる。

「じゅ、純君……起きてたんだ」
「おかえりなさい、勇次さん。随分とおはやいお帰りです
ね」

整った顔に冷ややかな怒りを滲ませた恋人をまえに、思わ
ず身がすくんだ。

「門限は二十三時のはずですが、今は？」
「え、ええと……六時、二十三分、です」

俺は鞆をしっかりと胸に抱きしめ、ジリジリと後退する。年
の離れた若い恋人の背中から噴きあがる怒りのオーラに冷や
汗が噴きだした。

「気付いたら酒入ってたし、車は運転できないし。その、帰
りが遅くなって悪かったよ、ホント」
「ふうん？」ゆたかなウェーブヘアをかきあげ、純は首をか
しげる。「何故僕を呼ばなかったんですか？ 迎えに行った
のに」
「ね、寝てるかと思って……」
「わかりました。ここに座りなさい」

純の指先は冷たいフローリングの床を指差していた。膝が冷たいから嫌だなんて言おうものなら、家から追いだされかねない。

純は正座した俺の目の前に、ベロンと三枚のレシートをつきつけた。そこに印字されている明らかに『女の子がいるお店でございます』と言わんばかりの店名の数々。

「以前残業で遅くなると言っていた日の、キャバクラの領収書が三枚。そして今日は？ どこに行っていたのか正直に言ってください。これでもし嘘をついていたら……わかりますね？」

氷のような美貌の背後から、ゆらめく炎がみえる。なまじ背が高く、顎の細い美青年だけに、その怒りは余計に恐ろしくみえた。

「い、いや、純くんっ！ ちょっと落ち着こう、これには深いわけが」

「言い訳、嘘つき、そして門限破りにキャバクラ通い——これ以上我慢できるほど僕は寛容じゃありませんよ。きなさい」

俺は鞆を抱えたまま、ジリジリと後退する。それをみた純は、形の良い眉をつりあげて、立ちあがった。

「これ以上僕を怒らせない方がいいですよ、勇次さん」

「努力はしてるんだよ、これでも！」